



BHUTAN

学校名：八王子学園八王子高等学校

氏名：長谷川 陽介

[担当教科：地理歴史科]

- 実践教科等：世界史A
- 時間数：2時間
- 対象：高等学校1年生
- 対象人数：36人

[1]単元名

ブータンの自立と課題

[2]単元の目的/目標（ESDの能力・態度）

- ・ブータンの近代化と国際化の目的について、内政の観点のみならず国際関係の観点から理解する。（多面的・総合的に考える力）
- ・自国の存立をかけて奮闘しているブータンの様子を学ぶことで、少子高齢化を迎える日本の今後の在り様を考察する。（未来像を予測して計画を立てる力）

[3]ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性
公平性	連携性	責任性

- ・ブータンの自然・文化・社会を地理的及び歴史的観点から考察し、日本との比較を通してその多様性を把握する。【多様性】
- ・国内総幸福（GNH）を国家のアイデンティティとしての観点から考察し、公平な社会の構築と国家の安定の関連性を理解する。【公平性】
- ・ブータンと近隣諸国との関係について知ることで、限られた国力の中で国家の存立を図って奮闘してきた様子を感得する。【有限性】
- ・自己と社会の関係を相対化し、持続可能な社会をつくる上での各自の責任を認識する。【責任性】

[4]単元の構成

時限	本時のねらい、テーマ	学習活動・学習内容	使用教材	評価の観点と方法
1	【ブータンの概要】 ブータンの自然・文化・社会について知る。 【ブータンの建国と動揺】 17世紀の建国以降のブータン史について、国際関係に注目しながら学習する。 （世A・高等学校1年）	【ブータンの概要】 ・地図や写真を見て、以後の学習に必要な情報を得る。 【ブータンの建国と動揺】 プリント学習を基本として、現代に至る過程を理解する。	・プリント ・PowerPoint	学習活動の観察
2	【ブータンの自立と課題】 ・20世紀以降のブータンを取り巻く国際情勢を学ぶ。 ・国民総幸福（GNH）が提唱された背景を考察し、国家の存立に奮闘するブータンの姿を感じ取る。 ・『「幸せの国」とは？』というテーマで意見交換し、社会と社会の構成員としての自己の責任について考える。	・プリント学習及び PowerPoint の視聴を通し、学習に必要な知識を得る。 ・「幸せの要素とは？」「幸せの『国』とはどういう国？」というテーマに対し、意見を発表するとともに、他の生徒の意見を耳を傾ける。	・プリント ・PowerPoint ・民族衣装（ゴ）	学習活動の観察 発表の内容と傾聴する態度

〔5〕授業の詳細

1 時限目：【ブータンの概要・ブータン建国と動揺】

はじめに、ブータンの自然・文化・社会について授業する。生徒の学習活動は受け身になってしまうが、視覚教材を活用することでブータンに興味・関心をもたせるよう努める。

次に、ブータンという国家がどのように成立したのかを、8 世紀にさかのぼって授業する。8 世紀から 16 世紀のブータン史は、多分に神話的内容を含んでいるため、授業には注意を要するが、ブータンという国家の成立に関わる文化的背景として紹介していきたい。その後、17 世紀にチベットでの宗教紛争に敗れたガワン＝ナムゲルがブータンにやってきて、チベットやモンゴルの侵入を撃退しながらブータンを統一していった過程を授業する。この授業の中で、ヒマラヤ山脈のふもとの渓谷が、自然の要塞となってブータンは外敵から守った一方、「谷ごとに言葉が違う」といわれるほど国家としての統一を阻んだことに気づかせたい。

本時の中核となるのは、大自然に守られて孤立「できていた」ブータンが、19 世紀後半の帝国主義の影響を受けて対外関係を意識せざるを得なくなった点である。この点につき、イギリスによるインドの植民地化について簡単に言及した後、地図を活用してイギリス勢がひたひたとブータンに迫った様子を感じ覚的に理解させたい。そして、こうした外圧が、それまで分立し抗争を続けてきたブータンの諸勢力を結集させたことと、イギリスに対し親和政策をとり対外的な支持を得たウゲン＝ワンチュックが統一国家ブータン王国を成立させたことをしっかりと理解させ、次時につなげたい。

2 時限目：【ブータンの自立と課題】

まず、前時の復習と本時の導入を兼ねて、初代国王となったウゲン＝ワンチュックの政策を授業する。その後、第2代国王の時代がちょうど戦間期であったことに触れ、わずか 30 年間でブータンを取り巻く国際情勢が激変したことを解説し、こうした変化が「最後の秘境」「シャングリラ」と呼ばれ世界から隔絶されてきたブータンに、世界との関わりを否応なしに迫ることになったことに気づかせたい。

ブータンの近代化は、鎖国を解き世界に（ごく僅かではあるが）門戸を開いた第3代国王の治世によって推進されたことを解説する。具体的な政策名を列挙することで、生徒が近代化するブータンの様子について実感をもって理解できるよう、工夫して授業を進めたい。

本時の中核は、第4代国王による、革新的ともいえる近代化である。この国王は、かの有名な国民総幸福（GNH）を提唱した国王なので、生徒も多少親近感をもてるかと思われる。まずはそれを利用して興味・関心を引き出したい。そして、なぜ 1976 年に国際社会にGNHをアピールしたのかを考察したい。ブータン王室と血縁がある隣国のシッキム王国は、1975 年にネパール系住民の力によってインドに併合され消滅した。この出来事を紹介し、小国ブータンが国家存立の危機を感じていた（であろう）ことを推察させたい。この考察を通し、GNHという概念が、国際社会に対しブータンの存在をアピールするスローガンの側面を有していることに気づかせたい。さらに、国家存立の危機という、日本に暮らしていればまず考えられない事態を生徒に感じ取らせ、国家というものが、生徒が思うより脆い存在なのだというところを感じさせたい。この理解が、結びの「『幸せの国』とは？」というテーマ考察につながる。

展開の最後に、現国王の治世について、前2代の国王から続けられてきた近代化が民主化と憲法制定という形で結実したことを解説する。

本時の結びとして、近代化するブータンの様子を、研修旅行で得た写真などの教材を活用して感じさせる。伝統衣装を着ながら iPhone をいじるブータン人の姿や、ゴミが山と積まれた廃棄物処理場の様子など紹介し、はたして近代化と国際化がブータンを幸せにしてきたのかどうかについて、生徒各自に自由に考えさせたい。その上で「『幸せの国』とは？」という大テーマを掲げたい。いきなりこの大テーマを考えるのは酷であろうから、小テーマとして①「幸せの要素とは？」②「幸せの『国』とはどういう国？」という小テーマを掲げる。そして、②の小テーマの考察を通し、生徒は「個人が幸せであること」と「『国』として幸せだといえる」というのは違うという点に気づかせたい。

最後に、次のどちらかの課題を選ばせる。

- ① 新聞記事「『幸福の国』の悩み」を読んで、記事の最後にある「欲望の落ち着き先はどこなのか。」という問いかけに対するあなたの考えを述べなさい。
- ② ブータンは、世界で自国の存在感を高めるためにGNHを掲げています。さて、日本は今でこそ世界でその存在を認められていますが、これから少子高齢化の時代を迎え、国家の規模は縮小していきます。では、日本は「Japan」として世界の中で生き残るために、何を目標とすればよいと思いますか。あなたの考えを述べなさい。

提出された回収した課題の中から考察が優れているものを抽出し、教師の所見を添えて生徒にフィードバックする。

〔6〕児童・生徒の反応/変化

ちょうど本校で採択している英語の教科書でブータンが扱われていることから、生徒たちは授業前からある程度ブータンに関する知識を持っていた。但し、その教科書ではブータンの国情を説明しないまま「世界一幸せな国」として紹介していたので、生徒たちは曖昧な印象しかもっていなかったようである。こうした背景から、生徒たちはブータンを歴史的観点から分析する授業に関心をもって臨んでくれた。特に、GNHが複雑な国際情勢の中で生み出された概念であるという考察には強い関心を示してくれ、国是として幸せを追求するとはどういうことかを真摯に考えてくれた。



以下に、生徒から提出されたレポートの文章を幾つか紹介する。(表現は荒削りであるが、若い感性で懸命に考えてくれたものなので、原文のまま掲載する。)

- ・「欲望ばかり追い求めているでも先に幸せはないと思います。しかし、それはきっと不可能なのだと思います。『生きる』ということ自体が『生への欲望』なのだと思います。」
- ・「欲望の落ち着く先などはない。だが、その欲望の質はいくらでも変えられる。それは、指導者などの人達がどのような欲望に満たされているのかが影響してくるだろう。」
- ・「ブータンのGNHをもとに、地球全体の幸福を世界が目標として、各国が良いところを持ち寄り築き上げていくことが現代の社会では求められているのだ。」

〔7〕授業実践の成果と課題

正直に言って、今回の授業実践は不安に駆られ怖いものだった。最後の感想に記したように、私自身がブータンをどう分析し、何を学び得るのかについて最後まで自信がもてなかったからである。そこで、思い切って生徒に「私にできるのは、歴史という切り口で私なりに分析したブータンを伝えること。授業によって共有した知見をもとに、ブータンから何が学べるかを一緒に考えよう。」と呼びかけた。これに対し、上掲の生徒のレポートから分かるように、グローバル社会における国家の在り様や、「『国』が国民を『幸せ』にするとはどういうことなのか」を考えてくれたことが、今回の授業実践で得た何よりの成果だった。この問いを共有し続け、考え続けることが何よりの今後の課題である。

〔8〕参考文献(引用文献・参考資料)

- ・『The HISTORY of BHUTAN』Karma Phuntsho, Random House India, 2013 年
- ・『ブータンの歴史－ブータン小・中学校歴史教科書』ブータン王国教育省教育部, 明石書店, 2008 年
- ・『体験取材！世界の国ぐに－21 ブータン』岡崎務, ポプラ社, 2007 年
- ・「GNH(国民総幸福量)の概念とブータン王国の将来－GNPからGNHへ－」宮下史明, 早稲田商学第 420・421 合併号, 2009 年
- ・「ブータン王国新憲法草案の特徴及び概要」諸橋邦彦, レファレンス(国立国会図書館)平成 18 年 3 月号, 2006 年
- ・「ブータンの情報化にかかわる諸様相－そのダイナミズムと構造的特性」藤原整, 社会学論集(早稲田大学), 2013 年
- ・「COMPARATIVE SOCIO-ECONOMIC INDICATORS FOR BHUTAN June 2013」National Statistics Bureau of Bhutan, 2013

〔9〕使用教材(写真／図などの実物)

以下は、全て授業実践で使用した PowerPoint の資料です。

ブータンの自立と課題



「近代化」と「国際化」の時代(20世紀後半～)

2時限目の冒頭(第3代～第5代国王)

ブータン王国の成立(1907)



初代国王 ウゲン＝ワンチュック(位:1907～26)

ブータン王国の建国(初代国王)

第2代国王の時代(1926～52)の世界



ブータンを取り巻く国際情勢の激変

ブータンを取り巻く情勢



第二次世界大戦後のブータンの隣国関係

第3代国王の時代(1952～72)

近代化 と 国際化

ブータンの近代化と国際化の時代の幕開け

コロンボ計画加盟(1962)



「ブータン農業の父」西岡京治(1933～92)

近代化の例(農業の近代化)

絶対君主による民主化!?

- 1953年 国会開設
- 1968年 国会の権限強化
 - ① 国会に対する国王の拒否権を放棄
 - ② 国会に **国王信任権** を与える
 - 不信任とされた場合、国王は退位
- 1998年 政権を大臣評議会(内閣)に委任
- 2008年 憲法制定

近代化の例(国王による政治改革)

2008年に生まれた二つの憲法



改革の難しさ(ネパールとの比較)

〔10〕教師海外研修を終えて(感想・今後の展望)

渡航前、「幸せの国」に関する様々な資料にあたってみると、浮かび上がってきたのは必死に世界と向き合うヒマラヤの小国の姿であった。「幸せの国」を象徴とも言える「GNH」というピースも、その姿の中に収まってしまった。果たして、このブータン像は正しいのか。現地での研修は、その答えを探すものであった。私が現地を見たのは、近代化と国際化に懸命に向き合うブータンの人々の姿だった。それと同時に、昔ながらの生活様式を続け、幸せを少しずつ味わいながら生きている素朴なブータン人の姿だった。近代化と国際化の正負の両面が混在している現在のブータンをどう分析し、伝え、生徒に何を考察させればよいのか、暗中模索しながら授業の日を迎えた。しかし、ブータンを訪れ得たものを生徒に提示し生徒と同じ目線で共に考える中で、素のままのブータンの姿から少しずつ削り取るように学んでいけばよいのかなと思い始めた。今後もブータンから学びたい。